書き抜き読書ノート 1030	2011 年 7 月 23 日

杉山正明著「ユーラシアの東西―中東・アフガニスタン・中国・ロシア そして日本―」日本経済新聞出版社 2010 年 12 月 16 日刊を読む

ユーラシアの東西―中東・アフガニスタン・中国・ロシア そして日本―

１．時はゆき、時は流れる。そして、人は生き、やがては逝(ゆ)く。「歴史」というものをどう見るか、人ごとにさまざまな想いや感慨があるでしょう。いや、そんなのんびりとしたことをいっている暇はない、その日その日をひたすらに生きているのだといわれる方々もきっと多いことでしょう。それは、そのとおりです。とはいえ、わたくしたちより前に厖大な数限りない「生命」の連鎖が蜿蜒(えんえん)とあるからこそ、わたくしたちは今こうしてここにあります。たとえ、みずからは消滅しても、生き継ぐたくさんの命があるからとの気持ちは、おそらくは遥か昔から、少なくない人たちに共通するものでしょう。それはもちろん、自分の直接の家族・子孫に限られるものでは決してありません。だからこそ、「この世界」が今につづいてあるのでしょうし、それはまた「人間」というものを越えて、ひろく「生きもの」ということがらに属することかもしれません。

２．ふとしたことから、「歴史」という浮き世ばなれしたものを"なりわい"としていくらかの時がすぎ、「歴史」もしくは「歴史学」というものに「何か」の意味を求めてきたつもりではあります。では、ようするにそれは「何か」と問われるならば、率直に「今のため」、そして「これからのため」というほかはないようにおもいます。時の経過のなかに、人も社会も国家も世界も生きています。過去を踏まえ、現在をはかり、将来にひきつぐ――。本当の「歴史」「歴史学」は役に立つのです。いや、役に立たなければなりません。

３．個々の「生」の営みはもとより、その集合体であるさまざまな「歴史」の歩みを国境・言語・人種を越えて、できる限り広く深く全体を眺め渡し、知悉し、洞察することよりほかはありません。その限りにおいて、多言語世界に生きるのは普通のことなのです。しかし、「歴史」を知らなければ、人も社会も国家も世界もはかれません。

４．別のいい方をすれば、ロングスパンの思考と知識、総合的な把握と備え、そしてそれにもとづく長期・中期・短期の構想と戦略――。プラス・マイナスを含め、否応なく「地球世界」が急速に身近になりつつある今、日本国に欠けているのは、まさにそれだと存じます。

P289 ～ 290

[コメント]

足利市にある山浦啓榮さんがつくられた「華雨蔵珍之館」を最も高く評価して下さっている杉山先生の心温まる歴史に対する思いのあふれた本書は、歴史を学ぶ意味を教えて下さる。

― 2011 年 7 月 23 日林　明夫記―